

AL型授業への挑戦

昨年は全国でアクティブラーニング型授業(以下「AL型授業」)導入への動きが活発になった年でした。この連載では学校をあげてAL型授業に取り組んでいる高校と、そこでの先生たちの実践授業例をご紹介します。今回は、組織として取り組む方法について、「アクティブ・ラーニング研究チーム」を編成している大阪府立大正高校の事例をご紹介します。

企画協力／小林昭文(産業能率大学 教授) 取材・文／長島佳子



第5回 大正高校(大阪・府立)

School Data

1978年創立／全日制普通科総合選択制／生徒数556人(男子224人、女子332人)／進路状況(2014年度実績)大学21人、短大2人、専門学校37人、就職45人、その他20人

組織的なAL型授業の推進に向けて、研究チームを作り、全教科での取り組みを実施

学校全体への浸透を目指しAL研究チームを発足

2013年末、中央教育審議会の答申で、高等学校教育の改革として「アクティブ・ラーニングへの飛躍的充実を図る」と記されて1年が過ぎた。大正高校での取り組みは、2014年10月にAL型授業の先駆者である産業能率大学の小林昭文先生を招いた研修会から始まった。小林先生が全国で行っている、教員を生徒とした物理の授業形式の実践研修だ。

研修後、現教頭の安田幸一先生(当時は首席教諭)などベテランの先生が「まずは自分から」とリーダーシップをとってAL型授業を実践し始めた。それに刺激を受け、何人かの教員も取り組み始めたものの、広くは浸透していかなかった。

2015年度に、前教頭であった大西俊猛先生が校長に就任。

大正高校のアクティブラーニング型授業への取り組みの歩み

- 2014年 前校長時代に、授業改革のひとつとしてAL型授業の導入を決める
- 同年10月 小林昭文先生を招聘してAL型授業の研修会を行う(全教員対象で教員が小林先生のAL型の物理の授業を受ける)
- 研修会以降、個別にそれぞれの授業でAL型授業を取り入れることとする
- 2015年4月 前教頭であった大西先生が校長に就任。引き続きAL型授業を推進
- 同年夏休み AL型授業をより多くの教諭が導入できるよう、専任のアクティブ・ラーニング研究チーム(以下ALチーム)の発足を校長と教頭が決意
- 同年9月 14名の教諭でALチーム発足。現場の現状把握から始まり、11月に研究授業の実施を決定
- 同年11月 研究授業実施。現状の成果と課題を洗い出し、今後どのような授業作りをするかの方向性を検討



この連載の監修者でもある小林昭文先生が、昨年10月に同校で行った、物理の授業形式のAL研修会の様子。

「今年度の学校目標、AL型授業の増進のために、トップダウンの組織運営だけでなく、教職員のエンパワメントにつながるボトムアップの組織作りをいかに進めていくかを議論しました。その具体化として『アクティブ・ラーニング研究チーム(以下「ALチーム」)の発足が決まりました。チームの目的は、校内の実践状況を把握し、AL型授業の方法を研究し

て促進することです。その中間目標として、2015年11月に予定されていた小林教授の2回目の校内研修で、研究授業を実施することにしました。進路多様校である本校こそAL型授業が役立つのだという思いもありました。『自分たちのための授業』と生徒が実感でき、目の前の生徒に合った本校独自のAL型授業作りをしようと教員たちが考えたのです(大西校長)



大西俊猛校長

2012年まで大阪府立柴島高校で教諭として勤務。2013年より教頭として大正高校に着任。2015年より現職。

研究授業当日の実施内容

①4名の新任教諭による研究授業

2015年11月下旬に行われた研究授業では、新任の4名の先生が授業を行い、ほかの全教員と他校からの参観者がいずれかの授業を見学。授業開始前は寝ている生徒もいたが、机を動かしたり発言の機会が多いため、しだいに興味を持って授業に取り組みはじめていた(実施した先生の感想は次ページ参照)。



現代社会の授業では模擬裁判を実施。被告人役を教員が務め、裁判員裁判を生徒たちが実体験した。



喫煙年齢の引き下げについて考える保健の授業では、生徒が自分の立場を決めた上で、意見を発表。

②参観者による振り返り会

授業を担当した教員と参観者ごとに教室に分かれての振り返り会。参観者の先生には予め「見学用ワークシート」が配布され、生徒の変容に着目しながら「自分でも授業でやってみたいこと」に関する「しくみ、しかけ、教え方、支え方」などについて記入。それらのポイントをひとりずつ発表した。



各教室ともALチームのメンバーが司会者となって振り返りを行った。

③小林昭文先生の研修会

この日の授業者、参観者全員を対象とした研修会が行われた。実践形式の研修は前年に実施済みのため、この日はビデオで小林先生の授業を見て、グループごとに気づいた点や実践できそうな点をディスカッションして発表。また、AL型授業に対する不安や迷っていることについて小林先生への質疑応答が行われた。



研修の進行もAL型小林先生。時間を区切りながらテンポよく進み、受講者の発言の機会も多い。



大正高校の全教員が参加。AL型授業を若手からベテランまで一堂に学んだ。

アクティブ・ラーニング研究チームの先生たち



首席の野間先生(後列中央)と渡邊先生(後列右)を中心に、全教科の教員を含んだ14名で構成。安田教頭(前列右から2番目)は、一昨年に先陣を切ってAL授業に取り組みリーダーシップを見せた。

研究チームと教科教員が縦と横から若手をサポート

夏休みに、ALチーム設置を決定。ボトムアップの組織作りのためにAL型授業を積極的に行っている地歴公民科の西崎嘉仁先生と家庭科の裴直彦先生を代表・副代表とし、全教科から1名ずつと教務部からの計14名で構成。9月にチームはスタートした。まずはAL型授業の実施状況を調査。小林先生の研修から1年経った10月時点で実施していた教員は定期・不定期を合わせて半数にも満たなかった。これをどう広げていくかを検討し、年2回行っている「教員間授業公開」の11月開催時にAL型授業

の研究授業を行うこととした。チームメンバーのうち4名が11月27日に研究授業を実施することに決定。担当する教員が図らずも全員新任だったため、当日までにはほかのチームメンバーと各教科の先生方が、指導案作りや授業の進め方についてバックアップし、AL型授業の構成に取り組んだ。「短期間で4名の先生は本当によく頑張りましたが、今回の研究授業がチームとしても学校全体としてもスタート地点。振り返りと分析をしてこれからが本番です」(西崎先生) 研究授業を参観した小林先生は大正高校の取り組みについてこう語る。「前教頭が校長に就任したことで、



参観者の先生たちは「自分の授業でやってみたいこと」という視点で授業を見学した。

小林昭文先生は全教室を何度も回りながら、気づいたポイントを研修後に伝えていた。



前校長が始めた授業改革の意志がスムーズに連携されています。そして研究チームと教科の先生方の横と縦の両方のつながりで若い先生をサポートしているのが、ほかに例を見ないすばらしい試みです。大正高校のこれからに期待したいと思います」

研究授業を行った新任の先生たちの感想



武田 光先生
(国語・現代文)

AL型授業は発問が難しい
諸先輩の生の実践を見た

研究授業では正直、普段行っているAL型の授業よりしかけが不十分で満足できませんでした。自分の現状では、AL型授業は発問のしかたが難しいと感じています。AL型授業で生徒にもっと活動させるために必要な準備や、時間の設定のしかたなど、チームでアイデアを出し合ったり、先進的に取り組まれている先生方の実践を生で見てみたいと思います。



水野翔平先生
(数学I)

形にとらわれすぎず、学びの本質を考えて授業を作りたい

教員になりたてなので、今回の研究授業は自分にとって授業の幅が広がるチャンスだと思いました。実際に準備を始めると、形式を考えすぎてしまって授業の目的や本質を見失って混乱したときもあり、チームや教科の先生に相談して軌道修正してもらいました。普段寝ている生徒が起きて参加していたのがよかったですが、今後どう定着させるかが課題です。



山田彩加先生
(保健)

異なる教科の先生からも
助言をもらえた良い経験

指導案を作ることがまだ不慣れなので、準備が大変でした。他教科も含めた先生方にアドバイスいただけたことが良い経験になりました。今回は「喫煙年齢の引き下げ」をテーマにしましたが、保健はグループワークで意見交換しやすい題材が豊富。自分自身もAL型授業のほうが楽しいので、今回の反省と良かった点を生かして今後も続けたいです。



嶋本昌紀先生
(現代社会)

講義型授業の時とは違う
生徒の一面を見られた

研究授業に指名されたときは恐怖と戸惑いを感じました。模擬裁判をやりましたが、自分で出したアイデアとはいえどう準備していいか不安で、チームの先生方がシナリオのチェックや予行練習してくれるなど多くの助けをいただきました。授業では普段静かな生徒が活発な生徒を仕切る場面があり、生徒の新たな一面を見ることができてよかったと思います。

「生徒が振り返りシートに、授業での気づきなどを書く量が増えました。おとなしい生徒が実はよく聞いていたこともわかりました。生徒の変化を

自身の家庭科でAL型授業を実践した表先生はこう語る。
「生徒が振り返りシートに、授業での気づきなどを書く量が増えました。おとなしい生徒が実はよく聞いていたこともわかりました。生徒の変化を

「今回の研究授業は決して成功とは言いませんでした」
と、西崎先生は語る。教員研修の運営方法や、AL型授業のなかに教科の専門性を生かしきれたかなど反省する点が多いという。一方、首席の野間先生や渡邊先生は、職員室で授業のことを話す教員の増加や、若い先生の姿勢に中堅・ベテランが受けた刺激などの収穫を挙げている。

生徒の変化で教員について
火を燃やし続けることが大事



ALチーム
代表 西崎嘉仁先生(右)
副代表 表直彦先生(左)

自分たちが続けることで全体を変えたい。
AL授業を広げることが「私たちにとってのAL」



西崎先生の政治経済の授業では、毎回グループを変えて、生徒の発言が増えてきたようだ。



調理実習は本来ALだが、講義型だった事前学習にALを取り入れた表先生も、生徒の変化を実感。

「研究授業ではこのような生徒の変化をほかの先生に見てもらおうのが目的でした。『人は学ぶ環境さえあれば学ぼうとする』と言いますが、生徒も我々も同じだと考えています。生徒の反応を見ながら、いかに多くの先生を巻き込んでいけるかが、私たち自身のALだと思っています(西崎先生)」

「研究授業ではこのような生徒の変化をほかの先生に見てもらおうのが目的でした。『人は学ぶ環境さえあれば学ぼうとする』と言いますが、生徒も我々も同じだと考えています。生徒の反応を見ながら、いかに多くの先生を巻き込んでいけるかが、私たち自身のALだと思っています(西崎先生)」

「研究授業ではこのような生徒の変化をほかの先生に見てもらおうのが目的でした。『人は学ぶ環境さえあれば学ぼうとする』と言いますが、生徒も我々も同じだと考えています。生徒の反応を見ながら、いかに多くの先生を巻き込んでいけるかが、私たち自身のALだと思っています(西崎先生)」

実感できていくのだと思います」